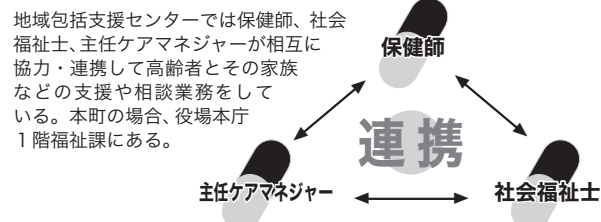


未来への投資

すべての人にブロードバンドを



地域包括支援センター
海老名重徳^{しげのり}センター長

その人らしい暮らしをサポートするのが使命。
しかし増え続ける需要に対応するため
訪問の効率化も考えなければなりません。

この訪問記録を書くのに、毎回2、3時間はあつという間に過ぎてしまったため、帰宅が遅くなってしまうことも多々あります。

訪問の効率化も必要に

職員は訪問したお宅で、あいさつから始まり、世間話をしながらその人の健康状態を確認します。また日常生活で困ったことや不安なことがないか、心のケアにも気を配ります。

例えば近所の人から「あの家のおばあちゃん、最近あまり調子が良くなさそう…」と連絡をもらって訪問してみると、糖尿病の薬を正しく飲めなくて調子を崩していたということがありました。また

別のケースでは、必要のない布団を契約してしまっていて、クーリングオフの手続きをすることもありました。

当然のことですが、「役場の職員だから安心して話してね」と言っても、いきなり何でも話してくれる人はいません。時間をかけて何度も訪問し、信頼関係を築くことが大切なんです。

本来なら、1軒1軒余裕を持って回り、世間話をするくらいのとおりを持って接したいんですね。しかし現在の職員数では、なかなかそれが難しい。仮に1日（8時間）で8軒のお宅を回ったとすると、車で移動する時間もありますから、1軒のお宅に立ち寄れる

時間も本当に限られてしまいます。このためどうしても、「訪問の効率化」を考えないわけにはいきません。特に注意が必要だと思われる人のところには、手厚い見守りが必要ですから、回数も増やさなければなりません。

職員の頑張りに支えられ

地域包括支援センターの最も大きな使命は、その人らしい暮らしをサポートすること。健康な人は健康を維持できるよう、介護が必要になりそうな人は、今以上に悪くならないように努力をします。

そのためセンターでは、関係機関や団体と協力しながら、年間通じて高齢者の相談に応じています。また、介護予防教室を開いたり、消費者被害を防ぐ啓発に取り組んだり、成年後見制度の利用支援をしたりと、住民の生活を守るため日々活動に取り組んでいます。

職員たちは、そういったさまざまな活動や事務仕事に追われながら、毎日の訪問に出かけていくんですね。つくづく、職員のマンパワーというか「頑張り」に支えられている部分が大きいと感じています。

でも将来への不安はある

現在、さまざまな立場の人が実

施している訪問活動。対象者の心のケアも含め、今以上の「見守り」はないと思います。しかし今の職員数で、今後も増えていく対象者のすべてに目を行き届かせることができるのか、不安を感じているのも事実です。

訪問したお宅では、買い物に行けない人を支援してほしいとか、病院の予約ができないか、外出支援車両の空き状況確認や予約ができないかというような話も聞きます。将来を見据えた体制を考えたとき、町が計画しているという光ファイバ網を利用したシステムが、見守りを補助できる可能性がある。どのように活用していくか、検討する価値は十分にあると思います。

訪問が待ち遠しいんです

保健師さんが尋ねてくれるのが本当に楽しみです。とても頼りにしています。絶対には守ります。保健師さんがいつもの時間に来られないとさみしく感じています。毎日でも来てほしいくらいですが、ほかにも待っている人がいますから、無理は言えませんね。



中田しんさん(右)と次女大河原洋子さん



優しい笑顔で会話しながら血圧を測る榊原和保健師。見守り(訪問)活動は、見守る側と見守られる側双方の信頼関係を築くことが最も大切だと海老名センター長は言う。

見守りの方。行方。

高齢化社会が進み、ますます求められる「見守り」。本町では、どんな体制で実施されているだろうか。そして見守りの、今後の展望は。

総合的な生活支援が目的

地域包括支援センターは平成18年4月1日、介護保険法の改正に伴って誕生した。住民の健康維持や生活の安定、保健・福祉・医療の向上、財産管理、権利擁護といった総合的な生活支援を目的とした機関だ。

見守りが必要な人の家を訪問し、その人の健康状態を確認したり生活の悩みごと相談に応じることも大きな役割の一つ。高齢化社会が進み、ますます需要が増している「見守り」の実情とこれからについて、包括支援センター長に現状と展望を尋ねた。

包括支援セは5人体制で

現在センターには、わたしを含めて5人の職員（社会福祉士、保

健師、主任ケアマネジャーなど）が勤務しています。介護保険で要支援1、2と認定された人、民生児童委員や区長から見守り依頼を受けた人、特定健診（65歳以上対象）の「生活機能評価チェック」で見守りが必要と判断された人、本人から希望があった場合などについて訪問をしています。

職員は、介護予防教室などを開くとき以外は、ほとんど訪問に出かけています。一人の職員が一日に回る軒数はだいたい4、5軒。多い職員では8、9軒回る者もいます。どの職員も夕方5時ぎりぎりまで訪問し、センターに戻ってから訪問記録を書くんですね。対象者が「どのような様子だったか」「どんなところに注意が必要か」といった内容を記録し、翌朝、全員で報告し合います。

▶お宅の玄関に飾られた花びん。派手な花より、つましく咲く山野草が好きと中田しんさんは言う。

ここにも、一つの物語。
広報かわねほんちょう